石垣原の戦闘（一）

「郷土戦史の研究」昭二・十一・十五
帝国在郷軍人会大分支部編

第一章　戦闘前の形勢

一、一般の形勢

天正十五年（一五八七）豊臣秀吉が島津を降して九州を平定した時、豊前北部の二郡（企救・田川）を毛利吉成に、南部の六郡（京都・中津・築城・上毛・下毛・宇佐〈妙見嶽城・龍王城を除く〉）を黒田孝高に、豊後の全部は旧の通り大友義統に与えた。吉成は小倉に、孝高は中津に、義統は府内に居った。

然るに、大友義統は、文禄元年（一五九二）部下将士六千余騎を率いて、豊臣秀吉の征韓軍に従軍したが、同二年正月平壌に於て小西幸長が明将李如松の為に破られた時、義統の処置卑怯にして戦闘も交えずして守地を棄てて退却したので、秀吉の怒る所となって、その封土を没収せられて、毛利輝元に預けられ、周防山口に幽閉せられた。ここに於て、建久七年其の祖能直が豊後の守護職となって以来の大友氏は、一旦滅亡しその部下は四散した。

秀吉は義統の領地であった豊後を九つの小藩に分割した。慶長三年（一五九八）に秀吉が永

眠した後一年を経て、慶長五年徳川家康、石田三成が東西に対立して、まさに関ケ原の大戦が起こりさうな気運が漸次熟した。

この年六月、徳川家康が兵を率いて会津にいる上杉景勝を討伐に出ている留守中、大阪城に於ては石田三成が着々開戦の準備を整え風雲愈急を告げた。天下の諸侯中少数のものの外は、各々その見る所によって東西何れかに属し、両軍勝敗の数逆睹すべからざる状態であった。

二、戦闘直前に於ける豊前豊後の状況

これより先き黒田孝高は石田三成と快からず家康に属していたが、その世子長政をして家康の東伐軍に従はしめ、自分は慶長五年中津に帰って、ここに築城の工事を督しつつひそかに形勢を窺っていた。七月十七日愈大戦の計画の具体化下のを知るや、直ちに中津の工事を中止して自己の領土の国境にある諸城の守備を堅固にすると同時に、盛んに兵を募集して出師の準備をなした。一方に於ては大坂、鞆津および上の関の三ヶ所に軽快な船を配置して、逓伝の要領によって三日を出ぬうちに京阪地方の情報を知る手段を講じていた。

西国東郡	高田城	竹中伊豆守隆重	
東国東郡	富来城	垣見和泉守一直	
同　断	安岐城	熊谷内蔵允直盛	
速見郡	杵築城	松井佐渡守康之	

（細川忠興所管）有吉四郎右衛門立幸

大分郡　府内城　早川主馬首長敏
北海部郡　臼杵城　太田飛騨守一吉
南海部郡　佐伯城　毛利民部太輔高政
直入郡　竹田城　中川修理亮秀成
玖珠郡　角牟礼城　毛利高政所管
日田郡　日隈城　同断

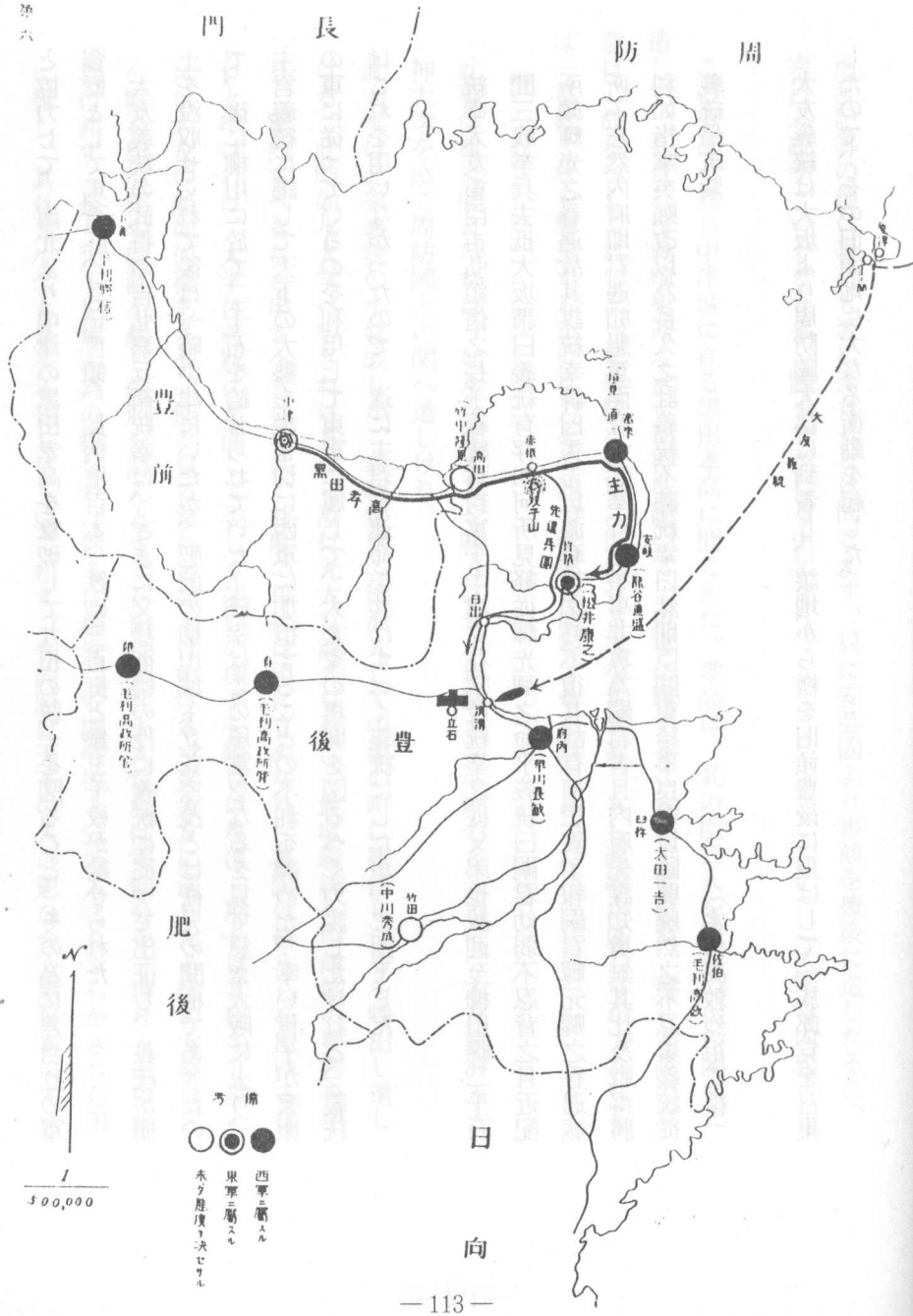
右の中で杵築城丈は東軍に属しているが、高田城主竹中隆重と、竹田城主中川秀成とは共にまだ態度を決せず形勢を観望中で、その他は悉く西軍に属していた。

黒田孝高は、国境の警備を検する事を名として漁船に乗って海上から富来城および安岐城の偵察をなして杵築城に到り、城代松井康之、有吉立行と会して有事の際に於ける諸般の打合せをして帰った。

三、大友義統の豊後上陸

大友義統は是より先幽閉から赦されて、その世子義乗は徳川家康に従って上杉討伐に出ていたのであるが、毛利輝元が義統を大阪に招致して秀頼の命を伝えた。それは旧領豊後を与えるに就き、急ぎ豊後に帰って一族郎党を集めて、現に豊後に居る諸侯および小倉にある毛利勝信

石垣原戰鬪前ニ於ケル豐前豐後ノ形勢


長門
周防
豐前
豐後
肥後
日向
主力
黑田孝高
毛利高政所管
毛利高政所管
毛利吉成
毛利秀元
毛利勝信
毛利秀元
毛利高政

と協力して、南北より中津の黒田孝高を撃破して九州の統一を図ること。その為に差当りの軍資財として馬百匹、具足百領、長柄槍百本、鉄砲三百挺と銀三千枚が給せられた。

大友義統の武将の吉弘嘉兵衛統幸は、さきに文禄征韓の役に義統に従って出征し、義統が領土を没収せられて後は一時中津にいたが、肥前の柳川城主立花宗茂とは従兄の間柄であったので、後に柳川に於て二千石を給せられていた。統幸はこの風雲急なるを見て急ぎ大阪に上り、主君義統に謁して天下の大勢を説き切に西軍に加担することの不利を諫めた。幸い世子が家康の軍に従っているのを利用して東軍に属して、大友家の再興を図るべく力説したけれど、義統はこれを用いなかったので、遂に主君と運命を共にすべく義統にしたがって西下した。

統幸大友重臣吉弘鎮信之長子義統奪封寓于中津立花宗茂統幸之従父弟也故迎至柳川賜二千石聞三成挙兵去抵大坂謂曰義統有存如何所見軽従輝光卿之命乎義統曰嗣君幼弱不忍背之且近配所頗輝光之眷遇故其謀統幸諫曰秀吉以濫奪封国終不復其故有何思義了報嗣君輝元卿之眷遇誠所不忘然内府即君遇頗懇篤而今大老奉行之挙事非専為嗣君者且内府先謀知勇無其比及戦得勝利如指掌矣願改以為長久之計義統不聽統幸曰然則臣関東給事良君以國興廃然之不忍棄義統従義統帰筑紫

〔木付高敦烈祖成績〕

大友義統は大坂より周防國大畠に到着し、該地から檄を旧領豊後に飛ばして一族郎党を召集したので、その旧領地に大なる衝動を起した。

治乱記等の趣は義統大坂に至れりとは聞こえず、只に安芸國より書簡を豊後に遣したるに、宗行（統幸）いそぎ安芸　國まで至れる由記せり。

〔太宰管内志〕

この事は、忽ち中津城に在る黒田孝高に聞こえた。孝高は、其の臣二人を周防の上の関に先遣して、九月七日義統を迎えさせ利害を説いて、東軍に属することをすすめた。蓋し孝高の真意は、成るべくこれによって義統を東軍に従わせる事をすすめ、もし義統が応じなかったならば一挙にこれを撃滅する為に兵力その他の状況を偵察させる為であった。

此事中津に聞えければ、如水今度大友を味方にせん為家人宇治勘七と云者に、大友家浪人大神大学を添て周防國上の関へ遣しけり。

此大学は元来義統の小姓成しが、義統蟄居の後浪人して中津の町に居住しけるを呼出し遣しける。此時如水大学へ申されけるは、汝は元大友浪人なれば、此度義統へ中津城の要害を語り、案内すべきなと申すべきなれ共、此度の軍には用に立ぬなり。其訳は皆うらを用ゆるなりと申ければ、大学は義統に対面して委しく使いの様子を語りければ、勘七は其座を立勘七には大友の船如何程あるや、能々見て参れと如水は申ける。又大友に送りたる状の大略は、今度石田治部少輔乱を起し内府を討んとす。石田は天性小人なれば秀頼公を守護せん為の義兵に非ず、全く天下を奪ん為の謀なり。然るに輝元、安國寺等と云佞人にたぶらかされ石田に組し、其外大小名も是を不知して三成に組す。今内府は天下の人の思ひつく處賢者にて八

州の主なれば、其威勢既に盛んなり。且武勇知謀古今に勝れたる良将也。又組する人々は皆猛将勇士多し。治部不義にして兵の道を不知して乱を起し諸人組せざる處天罰遁れ難し。況軍慮更になし。たとひ大軍を催す共、仮集たる寄合勢にて治部少輔が下知に随ふべからず。諸軍の下知を聞て大将なくして必軍に利有べからず。貴殿治部の方に随し玉はば必身を亡し家を失ひ玉ふべし。然ば貴殿の死生存亡の落着此時にこれ有べく候間能々御分別有るべし。殊に御子息義乗も内府に属せられ候へば内府方に参て忠勤を励み然るべく存也と申し遣はさる。又口上には、故太閤の御時、大友家降参の事我等取次申て候より以来朝鮮に至る迄隔心無く談候事義統御失念有る間敷候。我等も疎意に不存候。其印に大学相添候とぞ申し遣されける。

〔増補大友興廃記〕

併しながらも大友義統は最初の決心を翻さなかった。孝高の使者には何れ二三日中豊後に着いてから返事をする旨述べて帰し、八日上の関を出帆九月九日の夕刻速見郡濱脇に上陸した。濱脇上陸の日に就ては、豊後乱記には八月七日、豊西記には九日、豊国紀行及び増補大友興廃記には十日と出ている。

四、杵築城の強襲

義統は濱脇に上陸するや、直に別府の町に火を放ち、朝見山に於て戦勝を祈り更に進んで立石にその兵力を結集して大に覇を称えた。

元来豊後は大友氏の旧領である。一族旧臣は久しく不遇にあった旧主の光輝ある帰国を知って涙ぐましい喜びであった。先に義統からの布告に接し、今やその旧主が立石に覇を称へたことに就いては、山河響に応じて我も我もと其の麾下に馳せ集まり、或は糧米なども献上してその誠意を表した。

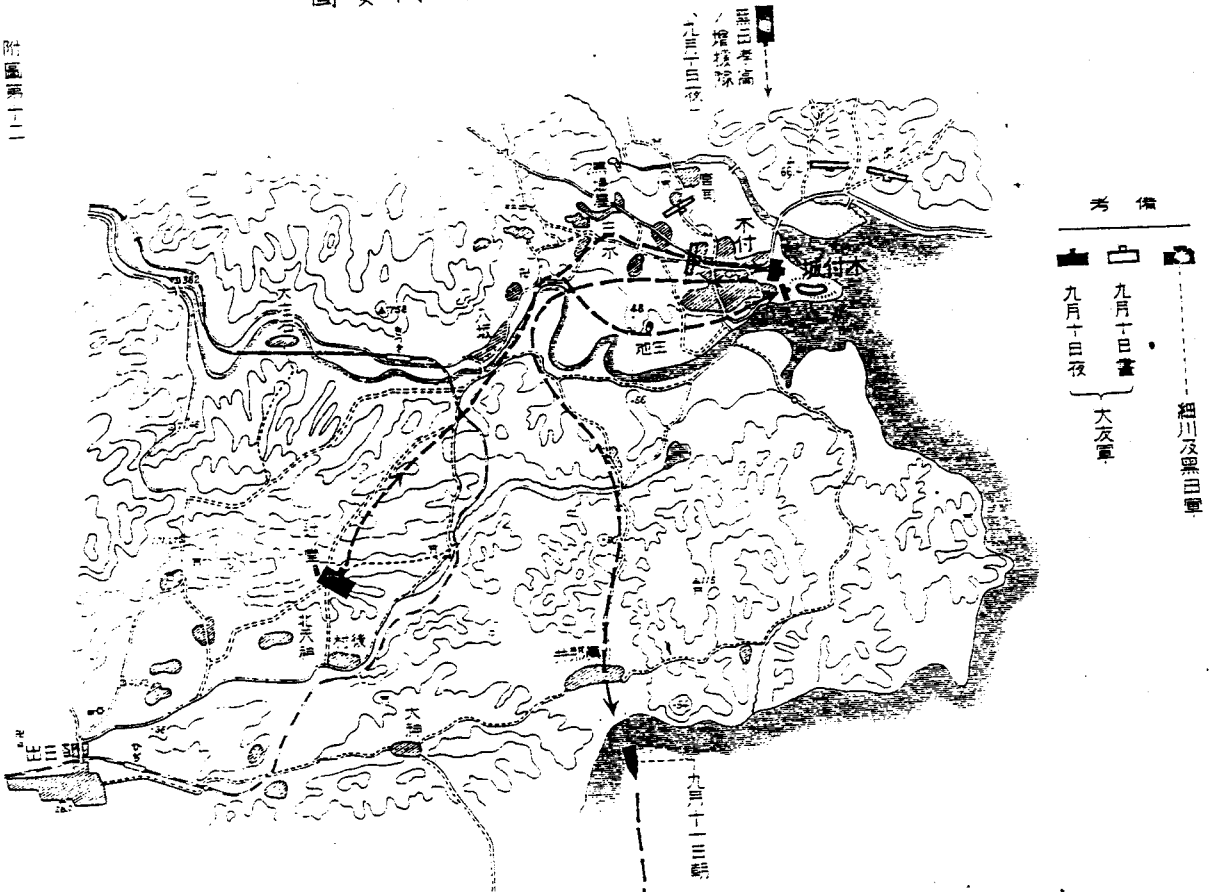
吉弘統運（吉弘統幸の弟）は、柳川の立花宗茂の所に寄寓して居たが、一番に馳せ来り、宗像鎮次、田原紹忍の両将は義統が除国せられた時に、直入郡の竹田城主中川秀成に属していたのであるが、今度は義統の挙兵を聞いて秀成の好意の下に中川家の旗指物を借り受けて、竹田より馳せ参じ大友氏の士気大に振った。

上略　今に至って旧恩を慕ひ、昔の好みを忘れざる者多く其家人共も多く浪人にて或は土民と成たるも有しが、今度義統の下着を聞伝、爰彼より馳集て既に大勢に及べり。其の上土民百姓共旧主の好みある故、義統の下向を歓び兵糧米を運送しける　〔増補大友興廃記〕

翌八日には郡中の諸老、江屋、農民に至る迄、旧主君の来り玉ふと聞くや大に悦び蟻の如く集て糧米など献ぜんとて各々皆運送す。　〔豊後乱記〕

当時に於ける豊後の状態に就ては既に前に述べた通りで、純然たる東軍は細川忠興の杵築城のみである。

木付城ノ戦闘要圖


黒田孝高ノ増援隊（九月十日夜）
木付城
三ヶ所
池
大友軍
九月十日晴
九月十日夜
細川及黒田軍
九月十一日朝
大友軍
大友軍
大友軍

これより先き木付城代松井康之、有吉立行は大友義統帰国の情報を得るや城内二の丸に仮普請をして、速見郡各地の庄屋頭、惣百姓を人質として押篭め、以て厳に領土の確保を図っていた。義統上陸するや旧臣百姓歓呼の裡にも其の人質の奪還を切に願うた。そこで義統も豊後唯一の異分子を一蹴し木付城を占領して、黒田軍に対する戦の拠点としたい考えから、吉弘統幸に二百騎を属して木付城を攻撃させた。

城内には大友の旧臣で内応者もあったので、十日夜統幸は城内の内応者と呼応して夜襲を行い、猛烈に攻撃して二の丸まで占領し人質を奪還し、続いて本丸に向て猛襲を続けたけれど、城兵よく死守した。一方急を黒田孝高に告げたので、十一日払暁城まさに陥らんとする時孝高の救援隊が近くに到着した。大友軍は、其の目的を達成すること能わずして止むを得ず引き返した。

この攻撃に就て増補大友興廃記その他の記録には、義統が宗像鎮次を将として木付を攻撃をさせたと載せてあるものがかなり多い。

去程に、大友方より討手の大将には、宗像掃部を大将として、木部山城、大神監物、柴田小六、都甲兵部抔云者を差添、郷人共多く馳加はり都合其の勢五千人ばかり遣しける。

〔増補大友興廃記〕

速見郡は細川越中守の領地たるに依て木付の城番代として松井土佐守、右田武蔵守二人在城

す。此度関ヶ原一乱には、速見郡の郷民等が妻子を悉く人質に取り、木付の城中に置けり。此妻子を取返し給るべき由愁訴せしむるに依て、義統公不便に思はれ、柴田小六郎に軍勢を差添へ、同十一日の夜木付の城に押寄、鯨波を挙げ短兵急に攻入二の丸を押破り、人質を悉く取返し引退く。已に其夜の暁天におよんで大将柴田小六郎高き所に登り、甲をぬぎて暫く休息しけるを、城中より鉄砲を以て之を打。其間二余り有ければ、打越て小六郎が頭を打砕かれて忽ち死す。其骸を兵船に乗せ大友の本陣に帰る。〔豊南記〕

五、黒田孝高の南進

黒田孝高は、大友義統が西軍に属するを知るや、その豊後に上陸して勢力を加えない前に断然これを撃滅するに決し、小倉の毛利に対して中津城その他一二の城に一部の兵を残し、主力を以て九月九日早朝中津を出発して南進を起す。その行軍序列は次の通りであった。

第一陣　母里太兵衛友信
第二陣　黒田兵庫助利高
第三陣　栗山四郎右衛門利安
第四陣　野村市左衛門
第五陣　母里與三兵衛
第六陣　久野次左衛門

以上兵力合せて八千余騎別に黒田孝高の麾下千余。

兵力合計九千余士気頗る昂り、翌十日朝高田城に到達してこれを威圧した。城主竹中隆重はこの時は未だ形勢の観望中であったが、此勢に懼れてその長子に兵二百を授けて孝高の軍に加わらせた。

黒田孝高はこの夜赤根峠に達したが、時に恰も杵築城代松井康之の使者が来て杵築城の危急を告げた。孝高直ちに井上九郎右衛門、野村市右衛門、久野治左衛門、母里與三兵衛の四隊を先遣して、まず杵築を救援し次に立石にある大友義統を攻撃することを命じた。孝高の考えはこの兵力を以て義統攻撃の第一梯団とし、自分は主力を以てこれに続行せんとするにあった。

翌十一日孝高は富来城を包囲したが、城兵の守備堅固なのを見てこれを攻略するにはかなりの時日を要することを判知した。この間の時日を義統に仮すのはその勢力を増加させることになる。勝利は敵の主力を撃破することにあり、義統さえ撃破すればこんな小城はどうでもなると考えたので、囲みを解いて前進を続行し、十二日夕熊谷直盛の守備している安岐城の付近に達し露営した。城中から出て挑戦したけれども孝高はこれに応戦せず、翌十三日払暁出発一部の兵を以て城兵の追撃を撃退し、尚も南進を続行した。

先に九日夜、赤根峠から先遣せられた第一梯団は間道を経て杵築に達したが、それに先だって大友軍は西方に退却したので杵築城代松井康之、有吉立行は城兵二百人余人を率いて第一梯団に加わって嚮導となった。

梯団は南進を続けて、九月十二日鉄輪南方地区に進出して、実相寺山附近に兵力を集結し、

（南立石）にある大友義統の軍と近く相対峙し、ここに石垣原合戦の幕は切って落とされた。

第二章　戦場附近の地形

石垣原は別府市の西北方にある起伏地であって、今は一面の松林であるが、当時は荒地であった。そして激戦のあった所は、今の別府から実相寺山の西を通って明礬に通ずる道路の西南側で、南立石と実相寺とを連ねる線が境川と交った附近であったらしい。

東は石垣村、南は別府、朝見の両邑、西は立石村より大平山麓、北は鶴見の原中村人家に接したり。其域や東西三十町に遠く南北二十町に近し、戦地は今海道より西に沿ふて大平山の裾野に松柏生たる野山の際南に傍て「五反畑」と号せし所に大石の五六個ある所也。里人この石を屋形石と称ふ。

〔石垣原戦略考〕

此の地を石垣原と名付し事は、石垣多くある故也。凡東西一里南北二十余町有て広き原也。西に鶴見嶽、鶴見山有。油布嶽高山相重り石垣村は北石垣、中石垣、南石垣とて三ケ村有。海に近く田作らんとするに、石多くある故一所に重ね集て石垣多く、長く所々に築ける故石垣原と名付、此所の古俗は鶴見原と云。此原は南は立石と別府に属し、北は石垣村に属し、西は鶴見嶽也。

〔増補大友興廃記〕

石垣原を含む一帯の地域は西に大平山（扇山）、鶴見嶽がそびえその裾野が極めて緩徐で、東の海の方に向かっている平地であって、南には観海寺の南方高地の脚が屏風を立てた様にこの平地を限り、北は鉄輪及明礬東側の高地によって区劃せられている。黒田軍の第一梯団がその兵力を結集した実相寺山は石垣原の北にあってこの平地の唯一の要点である。攻防共に有利であるが、特に立石附近の敵を攻撃する為には最も適当な拠点である。

大友義統の陣地たる立石付近はこの平地の南の境界にある高台で、石垣原に面して前に堅固なる自然の絶壁を具え、西は鶴見嶽によって敵の迂回を不可能ならしめ、南即ち背後には直ちに観海寺西方高地を負って防御の為には頗る要害の堅固な陣地である。

第三章　戦闘

一、戦闘開始前に於ける両軍の配置

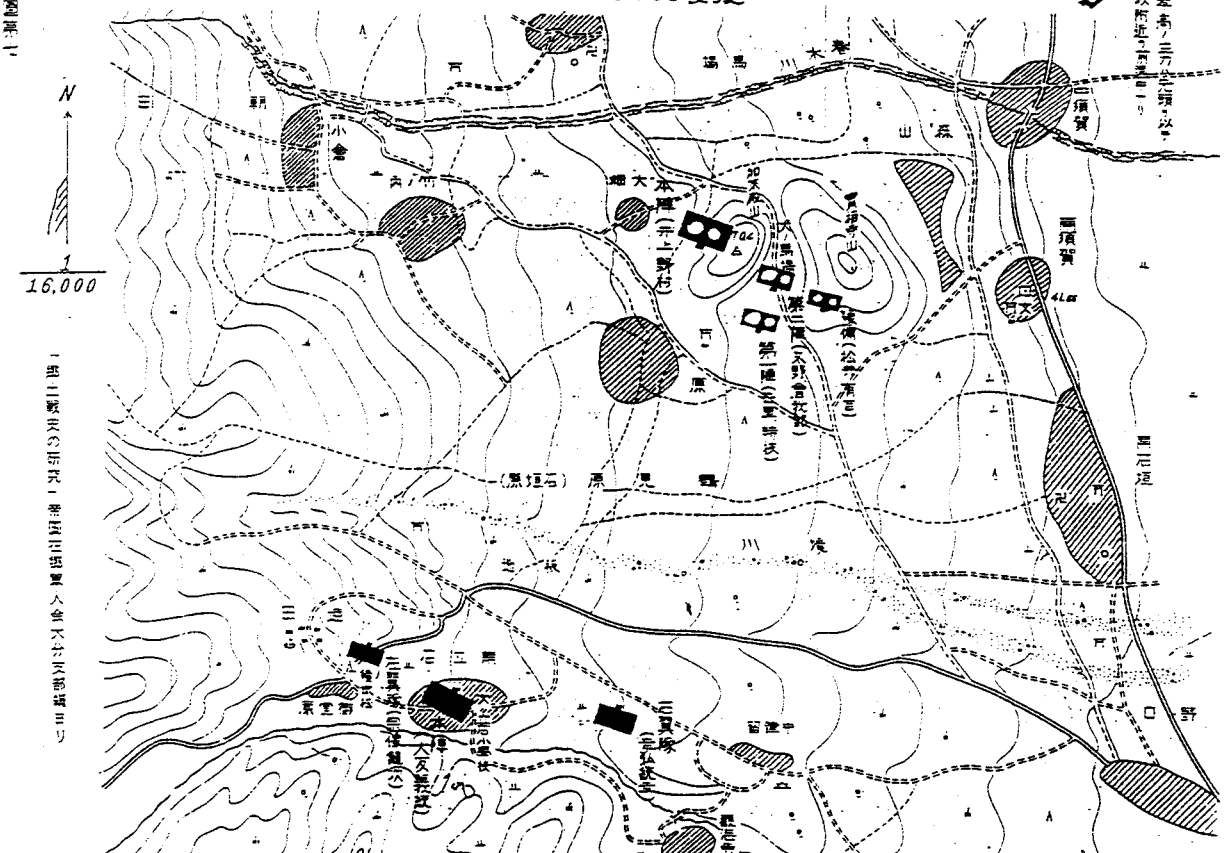
この会戦で大友軍は立石付近に陣地を占拠し、黒田軍は実相寺山付近に攻撃の拠点を占めたが、戦闘は両軍から其の中間にある石垣原で遭遇戦のような様式で実行せられている。

大友軍はその主力を立石に置き、吉弘嘉兵衛統幸は右翼隊となり坂本に、宗像掃部鎮次は左翼隊となり御堂ケ原に布陣した。

義統の本陣のあった所の西で五万分一図上に独立樹のある所に、大友義統がこの戦闘に使った陣鐘を掛けたという大きな松がある。鐘掛松という。御堂ケ原はこの松の西方約一町の所らしい。

石垣原戦闘前ニ於ケル両軍ノ配置要図

慶長五年九月十三日



黒田軍の第一梯団は井上九郎右衛門を総指揮官とし、左の軍隊区分に従い、実相寺山付近に進出してその隊勢を整え、先ず母里與三兵衛、時枝平太夫の指揮する第一陣を以て石垣原に進出せしめて、第二陣は、その後方に前進した。主力は角殿山（実相寺山西方）に集結して、爾後の攻撃を準備し、松井康之、有吉立行の指揮する二百騎は、実相寺山の南部の突角に位置して予備隊となった。

第一陣　母里與三兵衛　時枝平太夫
第二陣　久野治左衛門　曽我部五右衛門
本陣　井上九郎右衛門　野村市右衛門
（三千余）
予備　松井康之　有吉立行
（二百余）

この時黒田孝高の指揮する主力はまだ安岐城を出発して間もない時で、石垣原の戦場からは七里ばかり隔てている。これに反して大友義統の主力の陣地は実相寺山と三千メートルを出ない距離にある。しかしてこの戦場に現在する兵力は彼我大なる懸隔はない。大友義統は果して如何なる作戦に出るのが至当であろうか。

二、石垣原第一会戦

大友義統は吉弘統幸を第一陣とし九百余騎を以て石垣原に進出して、敵の第一陣を迎撃せしめ、宗像鎮次に五百余騎を与えて第二陣とし続いて石垣原に前進を命じ、自ら主力を擁して立石にあった。

吉弘統幸は十三日早朝、石垣原に進出して鶴翼の陣を張り、其の一部を挺進させて軽戦の後敵の先陣を誘致させる。

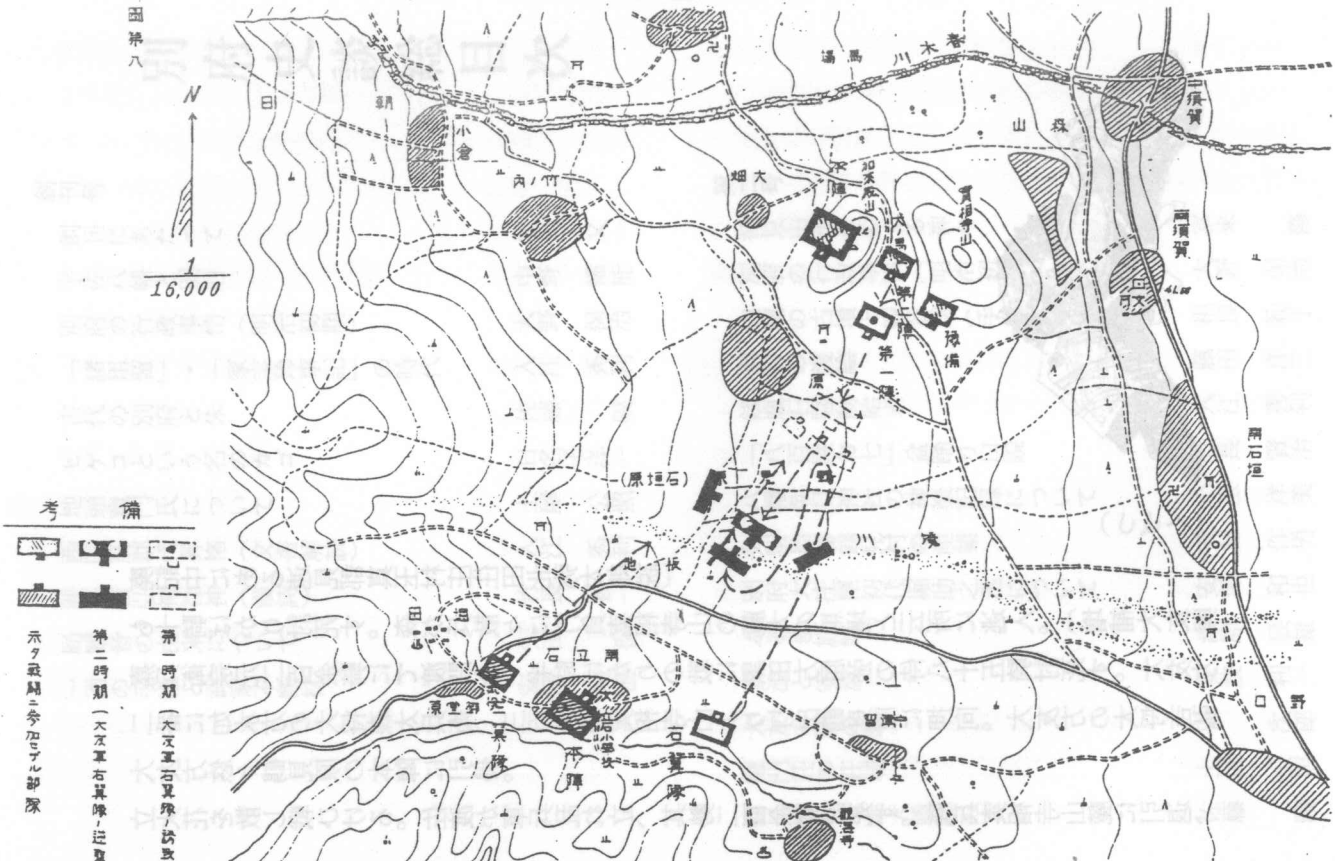
黒田軍の第一陣は勝ちに乗じて追撃したが、境川の線で統幸俄然攻撃に転じ正面と両側とから包囲したので、黒田軍は大いに奮闘したけれども遂に大なる損害を受けて実相寺山に向かい退却した。

統幸はこれを窮追して犬の馬場まで追い込んだ。この戦闘に於て黒田軍の戦死八十、大友軍の戦死十。

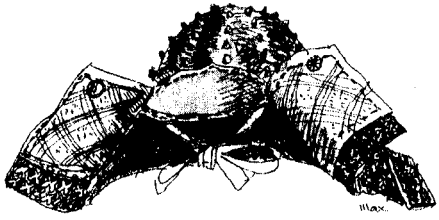
石垣原戦の次第、九月十三日早朝に松井佐渡、鶴見原に打出る。其勢三百余騎鬨を作りて押寄る。大友方の軍兵も馬を並て駈出て、互に鯨波を合せける。鬨の声静りければ、鶴翼を開き押包んとす。大友方少し引色にせければ、佐渡の兵共勇進んで打て懸るを、魚鱗立の真中を切て通り、後えずんとかけ抜て見れば、旗一旒ささせ百騎ばかり備を立たり。統幸之を見て、是は横鎗を見えたり、さらば両陣一所に集り討んとて、実相寺山の方如水本陣に急に打て懸る風情を見せければ、敵本陣に懸ると思ひ、両陣一所に成て懸りけるを待受、又魚鱗に

附圖第八

石垣原第一會戰要圖



立火花を散し戦ひける。佐渡が軍兵乱れ立、其勢二百余騎討死す。残兵実相寺山麓に引退、大友方悠々鶴見原の本陣に引帰。

二番に如水方の大将森太兵衛、三百余騎実相寺山より打出鶴見原に押向。大友方の大将吉弘嘉兵衛宗元二百余騎にて渡間合、半時ばかりの戦に黒田方屈強の侍八十五騎討死す。大友方も十騎ばかり討死す。森が兵散々に打負実相寺山の麓犬の馬場と云所に逃入。〔増補大友興廃記中にある速見郡真玉村庄住田北弥太郎説〕

（つづく）